

「長崎古町教会納骨堂内モザイクガラス」

2000年制作

内村直生 ガラス造形作家
うちむら なお
Nao Uchimura

- 1987年 修猷館高等学校卒業
1992年 多摩美術大学デザイン科
クラフト専攻ガラスコース卒業
1992年 渡アメリカ・シアトル
ガラス作家S・ブラム氏に師事
1994-6年 渡チェコ共和国
ブラハ国立芸術大学留学
展覧会
2003年 チェコ共和国 パセキー国際芸術祭招待作家個展
2009年 ホテルザ・リッツカールトンホテル大阪
2011年 「Aus aktuellem Anlass」展(ドイツ)
2012年 「Young Art 2012 Taipei」展(台湾)
2013年 「WORLD APART FAIR」展(シンガポール)
「KI.日本の現代アート」展(上海)

主なパブリックコレクション
東京ミッドタウン(東京・六本木)
エルヴィン・アイシュ プライベートコレクション(ドイツ)

従来の器や花瓶という既成のイメージから脱却し
ガラス素材の新しい表現の可能性を追求しています。
ガラスアートの歴史は、西洋に始まりましたが
日本人ならではの大胆さと繊細さなど、自己を深く
見つめながら無二の美しさを生み出したいと日々制作
しています。

2016年東京にて個展開催予定。



題字・箱島信一書
発行 修猷館同窓会
東京支部事務局

〒185-0034
東京都国分寺市光町 2-14-85
(有)バルティール内
FAX 042-573-5060
東京修猷会ホームページアドレス
http://www.shuyui.jp

任運 任運 任運

〜にんぬんとうとう〜



東京修猷会会長
中川勝弘
(昭和35年卒)

新年おめでとうございます。去年は東京修猷会創立60周年を迎えた記念すべき年でした。10月に真夏日という異常な暑さに悩まされながら、あつという間に秋から冬となり、早くも新年が明けたというわけです。今年3月には、二木会が、600回を数えることになり、館友の長谷川閑史経済同友会代表幹事(昭和40年卒)に記念講演をお願いしていますが、このように、東京での修猷館の同窓会活動が、長きにわたって、活発に行われてきたのは、何よりも修猷魂を共有した館友の絆の強さの表れだと思います。ITで情報共有が便利になったから、なおさら、人と人の直接のふれあいが、大事になってきたのではないのでしょうか。修猷館という学び舎での経験が年齢を問わずお互いを結びつけ、そして強い絆ができ、それが続くという暖かい関係はいいものですね。そのような暖かい関係をはぐくむ場として、東京修猷会活動をますます活発にしていきたいと思えます。

さて、世界情勢は今年も激動し、先の読めない難しい情勢が続くと思われれます。新年にあたってこの難しい時代をどう生き抜いていくかそれぞれが思いを新たにしていることと思いますが、私は今年が力まないで肩の力を抜いていこうと思っています。
禅語に「任運任運」という言葉があります。これから起ることは運に任せておればよし、将来のことをいろいろ思い悩んでも、なるようにしかかならないという意味です。昔「Que Sera Sera / Whatever will be, will be.(なるようになる)」という歌が流行りました。ラテン系の楽天的な、少し投げやりのいい加減さが歌のベースになっていたような気がします。驚いたことに禅語にもケセラセラがあるのです。しかし、禅の教えはこの歌とは違い、明日を思い煩うよりも、今を精いっぱい生きよ、今

日を充実して生きる、そしてその積み重ねが将来となるということにあります。今は一瞬のうちに過去となり、また未来となるのですから、よくよく明日を思い煩うな。むしろ今やっていることが意味のあることなのか、今自分が取り組んでいることは何なのか、よく考えてみよ。明日はなるようにしかならないということであり、作家水上勉が、心筋梗塞で倒れ死線をさまよい、奇跡的に蘇生した後に書いた「一日暮し」という本の中で、正受老人の名で知られる道鏡慧端の「一生を一日と思え」という言葉が好きだとしてこう書きだしています。「親への孝養も一日と思えば億劫ではないし、何もかも千日、百日など考えないで、一日をちゃんと生きることこそ、一生を過ごす眼目」と説いた教えにうたれたと。
確かに今を大事に、今を力強く生きていくことが大事だと思いますが、どういう今の生き方が望ましいのか毎朝の散歩で立ち寄る近所の寺の住職に聞いてみます。
毎朝住職は6時半から朝のお勤めでお経をあげています。その合間に住職と話をすることが私の日課になっているのですが、住職曰く、小さなことでも世のため人のためと思つて日々善行を積み重ねていくことです。継続は力なりとも。毎朝仏様を拝むことを続けること自体がいいことですよとの励ましも。
今年も新年にあたって格別になにか思うよりも、肩の力を抜いて、ただひたすらに一日、一日を大事に行こうと思つた次第です。



卒業生に新年のエールを送ります。

東京修猷会二〇一四年活動スケジュール

Table with 2 columns: Date and Event. Includes dates from 1月 to 12月 with details of meetings and events.

平成25年度東京修猷会総会

「無二」の仲間 つなげよう修猷力

実行委員長 中川 峰郎 (昭和62年卒・無二の会)

平成25年度東京修猷会総会は、25年6月14日(金)に、ホテルオークラ東京別館「アスコットホール」にて開催され、台風が接近するという悪天候の中、569名もの参加をいただき、無事終えることができました。ご参加いただいた館友の皆さま、ご協力いただいた方々に、ここに改めて御礼申し上げます。

◎「修猷力」をつなげるために

私たち昭和62年卒、無二(むに)の会は、まず、同期探しから始めました。個人的なつながりだけではなく、インターネットのFacebookで「無二の会(修猷館高校昭和62年卒業生の会)」という昭和62年卒限定参加のグループを作り、ネット上にいる全国各地さらには海外に住んでいる同期をこのグループに誘い、現在では160名強と連絡が取れるようになりました。同時にメンバーリストも作成し、こちらでも情報を共有できるようにしました。

◎落ち着いた雰囲気 学年企画を披露

当日は、第一部の総会では、物故者追悼に始まり、東京修猷会中川勝弘会長、福岡同窓会久保田勇夫会長、奥山訓近館長にご挨拶をいただき、土肥研一幹事長より事業報告等が行われました。

◎第二部の恩師紹介

は、西田敏博先生(国語、昭和58年・63年在職、現在福岡高等聴覚特別支援学校校長)と吉里俊幸先生(数学、昭和56年・平成12年在職、現在筑紫丘高等学校教諭)にご登場いただきました。昭和62年卒の担任をご担当され、同世代で同時期に在籍されたことのある両先



大澤一美副委員長(右)と筆者

生は公私共に親しい間柄で、近況の他、当時の修猷生の気質などを語っていただきました。例年は、懇親会で行っていた学年企画を、今回は恩師紹介に続いて行い、「東京修猷会の源流を探る」と題して、落ち着いた雰囲気の中で、東京修猷会の歴史を振り返りました。

第三部の懇親会は、大須賀頼彦副会長の乾杯のご発声によりスタートし、10年以上離れた先輩世代と後輩世代が交じるような配列として、交流を深めるようにし、食事も質を保ちつつボリューム感のあるものも数多く提供しました。また、デザートの一つとして梅ヶ枝餅を取り寄せました。

恒例となった学生応援企画のほか、博多銘菓のプレゼント、USTREAMでの中継と写真のネット掲載、「東京修猷会」の発行、昭和59年卒の先輩方の協力を得た修猷館グッズの販売なども花を添えました。

新会員紹介では、平成25年卒15名が壇上にあがり、代表として石橋麻梨乃さんが修猷館卒業生としての思いを語っていただきました。本年度は、未だかつてほとんど取り組まれたことのない東京修猷会そのものの歴史を企画テーマとしました。素材収集、考証、まとめと、プロセスのひとつひとつが非常に難しく、さらに限られたメンバーで準備をすすめる必要があったので、担当者にも多大な負担をかけてし

「東京修猷会の源流を探る」

企画部長 田尻 公一 (昭和62年卒・無二の会)

「そんな企画、本当に面白くなるの?」今回の総会メイン企画を「東京修猷会の源流を探る」に決めたとき、実行委員会の内外から、そんな声があがりました。「地味すぎる」「参加者の興味を引くとは思えない」「うるさい懇親会場で、どうやってそんなカタイ話を聞いてもらうのか」どれももつとも指摘で、企画部員をはじめ無二の会のメンバーは、うまい方法はないかと議論を重ねました。



伊藤くんによる名弁士ぶり

正直なところ総会を開催する年になっても、はつきりとした方向性が定まらないままではありましたが、何はともあれ東京修猷会の会長経験者や、年長の先輩方にインタビューを申し込み、ビデオ機材を担いで走り回りました。一方で、東京修猷会や総会、二木会に関する資料を手当たり次第調査し、さらに昭和51年・昭和55年卒の先輩方や福岡の同期の協力も得て、参考になりそうな資料を手当たり次第入手しました。

メイン企画用ビデオ映像作成のため、先輩方のインタビュー映像を編集し、ナレーションの台本を書き、音声を吹込む……。ときには合宿まで行いながら進めた準備作業は、修猷時代に戻ったかのようでした。

また今回は、福岡の懐かしさの味を堪能して頂くために、参加者全員に「梅ヶ枝餅」を、さらに福岡を何度も往復し、地元の同窓生とも協力しながら、有名な銘菓メーカーを訪ね歩いたメンバーもいました。



完成した「葉」は、彼女たちの助力のおかげで、当初予想していたものを遥かに上回る出来栄となり、東京修猷会創立60周年という節目の年に「東京修猷会のいま」を映したものととして、この葉は、皆さんの手元に永らく置いていただきたいと考えています。

東京修猷会体験 「修猷館」を共有すること

石橋 麻梨乃 (平成25年卒)



講義の関係で、少し遅れて会場に到着した私は、活

気あふれる九州の空気に驚き、懐かしさを感じた。しかし久々に会う同級生はすっかり方言が抜け、それぞれ異なる環境に向かつて歩み始めており、ここが東京であることを改めて実感する。初めてお会いする先輩方が十分なかな。

そのほかにも、数年前にも試みられた「USTREAM」による動画配信は、大きなトラブルもなく最後まで会場の盛り上がり全国に配信し続けました。また、昨年の総会で好評だった「顔はめ看板を使った「記念写真コーナー」、社会人の先輩と学生の後輩をつなぐ「学生応援企画」平成25年度修猷館同窓会総会担当学年の昭和59年卒の先輩方や修猷館同窓会の協力を得た「修猷館オリジナルグッズ」販売なども、参加者のみなさまにお楽しみいただけたのではないかと考えています。

メイン企画「東京修猷会の源流を探る」の中で、私たちは同期だけではない「館友の絆」の大切さを強調しました。そして今回の総会運営を通じて、世代を超えた新しい絆が数多く生まれました。私たちはこれからこの「新しい絆」をさらに強めつつ、3年後の修猷館同窓会総会に向かって、歩んでゆきたいと考えています。

東京修猷会2014年度総会のご案内

テーマ:「睦(むつみ)の力~修猷の絆~」

6.13

今年も第2金曜日

2014年6月13日(金) 18:00よりホテルオークラ東京 別館地下2階アスコットホール

幹事学年:「睦(六三)会(昭和63年卒)」

'14

2014年

日本は
どうなる?!

「世代を超えた絆」を深めよう

フジテレビ報道局 解説副委員長 山本 周氏(昭和49年卒) 寄稿

内外ともに様々な難題を抱える日本社会。長年政治の現場を見てきたフジテレビ報道局の山本周解説副委員長(昭和49年卒)に、これからの日本の課題などについて寄稿いただいた。

「決められない政治」から「決められる政治」へ。これが2012年衆議院選挙、2013年参議院選挙における国民の選択だった。よほどのことがない限り、次の国政選挙は2016年まででないだろう。このことはこれまで繰り返されてきた目先の国政選挙をならんだ短期的な発想の政治ではなく、中長期的な視野に立った政治が可能であることを意味する。必ずしも国民受けしない政策であっても、大胆に決断、実行できる環境にある。もちろん、権力が独善的に

なり、異論に耳を傾けなくなる、反発が広がり、権力基盤が不安定になるから、謙虚さを忘れないことが政権運営の大前提だ。政治的には安定しているとはいえ、課題は山積している。

現下の諸課題

内政では、デフレ経済からの脱却が果たせるかどうか第一の課題だ。金融緩和、財政出動それに規制緩和を軸にした「アベノミクス」の行方に世界が注目している。

4月から消費税率が8%に引き上げられる。4月以降に3月までの駆け込み需要の反動が出るのは避けられないだろうが、

そこからすんなりと回復基調に乗せられるかがカギだ。先が読みにくいのは、国際経済の動向だ。昔はアメリカがくしゃみをすると日本が風邪をひくと言われたが、いまや、アメリカだけでなく、中国、ヨーロッパの経済、そして中東情勢の変化が、回りまわって日本経済に影響する時代だ。日本経済を第一に考えるにしても、諸外国、地域の動向に目配りをし、衝撃をできるだけ小さくするために日本として貢献できることを最大限行う必要がある。

消費税率引き上げの最大の理由は、毎年1兆円ずつ増える社会保障費だ。消費税引き上げ分を充てるだけでなく、社会保障費すなわち、医療、年金、介護の制度そのものにも斬りこまない

と、結局、これからの日本を背負っていく若い世代につけを回すことになる。高齢者でも余裕のある人は応分の負担を求めざるを得なくなる。選挙を前にした政権ならなかなかできない政策だ。

さらに、福島第一原発事故の後処理と東日本大震災からの復興。汚染水処理をきちんとできるかどうか、順調に廃炉に持っていくのかどうか。また津波被災地は依然として荒涼としている。そしてエネルギー政策と地球温暖化対策の両立も課題だ。

選挙制度をどう改革するか。衆議院の場合、選挙区の線引きを変える、各都道府県に割り振る定数を変えるという小手先の

手法では、1票の格差是正の要請に答えるのが困難になってきた。定数削減の主張もある。また今は衆議院と参議院が似通った選挙制度だが、参議院は衆議院と違うやり方で議員を選ぶべきだという意見が強い。この問題も待たない。

外交に目を転じると、中国及び韓国との関係を元通りに出来るかどうか。中国とは尖閣諸島をめぐる問題がある。韓国とは竹島に加え、従軍慰安婦、徴用工賠償という問題を抱え、こじれてしまった感がある。日本としては譲れない問題ばかりだが、反感が、さらにエスカレートすることが懸念される。

北朝鮮の核、ミサイル開発、中国の軍備増強で日本を取り巻く安全保障環境は厳しさを増している。日米同盟の強化は当然だが、集団的自衛権の行使や国連の集団安全保障への参加など、これまでの政策を大きく転換するかどうかが焦点だ。憲法解釈の変更と絡むため、丁寧な説明が求められる。

高齢者が明るく幸せに暮らしている日本、体が不自由な人も楽に移動でき、かつ周囲の人が温かく支える日本、そして若い人と中年が対立するのではなく共生する、成熟した日本を見せられるだろうか。

世界各国からお客様が来るとなると、いろんな国の文化、習慣、言語に対応しなければならぬが、異なる文化を柔軟に受け入れることができるだろうか。

変わるか、日本

難しい課題ばかりだが、2020年のオリンピック東京開催が決まったことは日本にとってひとつ新しい目標ができたという意味で朗報だ。経済効果に目が向きがちだが、日本を変えていくチャンスととらえてはどうだろうか。2020年の世界がどうなっているか、想像できないが、世界中から大勢の人が観

戦に訪れるのは間違いない。日本が世界で紹介される機会も増えるに違いない。そこでどういう日本を見てもらうか、感じてもらうかをみんなで考える機会にしたい。

フクシマは完全にコントロールされ、沖合で採れた魚を安心して刺身で楽しめる。津波の被災地もすっかり整備されて賑わい、訪れた外国人たちを驚愕させる。こうした姿を見せられるだろうか。

2020年の日本は、少子高齢化はいまよりも進み、国立社会保障・人口問題研究所の推計では、15歳・64歳は、59.2%に減り、65歳以上の老年人口は29.1%になる。

高齢者が明るく幸せに暮らしている日本、体が不自由な人も楽に移動でき、かつ周囲の人が温かく支える日本、そして若い人と中年が対立するのではなく共生する、成熟した日本を見せられるだろうか。

世界各国からお客様が来るとなると、いろんな国の文化、習慣、言語に対応しなければならぬが、異なる文化を柔軟に受け入れることができるだろうか。

不思議な高校・修猷館

すべてを克服して、真に成熟した日本になってほしい。そう考えると、いまこそ修猷の仲間の出番ではないか。

修猷館は不思議な学校だ。高校時代全く面識がなかった、年の離れた先輩、後輩でも、会ったとたんにすく打ち解けてしまう。

1980年 関フジテレビジョン入社、報道局に配属。首相官邸、自民党、社会党、外務省などの記者クラブを担当、ニュースジャパン編集長、政治部長などを経て現職。



第32回東京修猷会 二木会ゴルフコンペ

2013年10月20日(日)

恒例の二木会ゴルフコンペが開催されました。中川会長、大須賀副会長はじめ、初参加者12名、女性7名を含む総勢36名の参加の下、千葉県山武市にある山武グリーンカントリー倶楽部で、同コース代表取締役社長の松本陸彦様(昭和39年卒)のご厚意により、実現いたしました。

当日は、生憎の雨の中、定刻通りにスタートしましたが、途中から雨がひどくなってきたため競技は前半で終了。前半のスコアを集計して表彰式を行いました。優勝は原忠さん(昭和56年卒)、準優勝は坪井正治さん(昭和35年卒)、3位は初出場の八尾紀子さん(昭和61年卒)でした。ベスグロは、男子がグロス47で土肥研一さん(昭和46年卒)、女子がグロス55で川井文子さん(昭和61年卒)でした。

今回も皆様から多数の純爛豪華な賞品をご提供いただきました。平成25年9月21日(土)、多くの館友並びにそのご家族、ご友人の皆様にご参加いただきました。第7回サロン・ド・修猷が学士会館で開催されました。今回は趣向を変え、ご出席者全員に参加していただくスタイルで、「ことばをつむぐ」と題し、二部構成にて皆様にお楽しみいただきました。

第一部は、各業界でご活躍の「ことば」のスペシャリスト、昭和45年卒の俳人 広渡敬雄先輩、昭和61年卒のコピーライター 松原淑先輩、平成7年卒の脚本家 入江信吾さんという豪華メンバーによるディスカッション。「ことば」にかける、それぞれの熱

たおかげで、表彰式はおおいに盛り上がりました。中川会長、大須賀副会長はじめ、松本様、西岡様、そして皆様にはこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。次回大会は、2014年4月20日(日)に大須賀副会長の御厚意により、名門「富士小山ゴルフクラブ」での開催を予定しております。奮ってのご参加をよろしくお願いいたします。



二木会ゴルフ幹事 徳川 隆志 (昭和62年卒・無二の会)

館友のお店紹介

鶏繁 麻布十番店

豊かな自然の中で育てられた南部赤鶏は、レバーから腸に至るまで鶏臭が無いのが自慢です。店長の山城賢二さん(昭和62年卒)は、この店を任されて14年。在学中はバレー部に所属し、運動会ではブロック長でした。お勧めは、団子(つくね)とレバー。山城さん曰く「レバーが苦手な人でもうちのレバーは絶対好きになるはず」。おいしくヘルシーな鳥料理を囲んで、館友と楽しい語らいをしてみてはいかがでしょう。おいでの際は是非ご予約を。

港区麻布十番3-11-12 (最寄駅: 麻布十番駅) 03-5445-1589 http://www.torishige.com/azabu/ 17時~23時30分 月曜日定休日

皆様、館友の皆様を支えていただきましたおかげです。本当に有難うございました。



左から、モデレーターの中川美穂さん(六一会)、広渡先輩、松隈さん、入江さん 三島 久美 (昭和61年卒・六一会)

*** Salon de 修猷会 ***
第7回
「ことばをつむぐ」

業際イノベーションと シニアの活躍を目指して

株式会社トヨタ・開発センター会長
井上 友二(昭和42年生)

(昨年、電子情報通信学会会長に就任)



修猷館時代は、無線部の部室に入り浸り、特に3年生の時

「無線部の部室(3階の廊下の突き当たりで東南の隅)の隣で、10分休みに部室に入らな

「アマチュア無線と酒を飲みながら気楽に現場で仕事をしよう」と思っていました。なぜか研究所に配属になりました

その嗜好が大学時代も続いて、電電公社に就職しました。

「アマチュア無線と酒を飲みながら気楽に現場で仕事をしよう」と思っていました。なぜか研究所に配属になりました

その嗜好が大学時代も続いて、電電公社に就職しました。

「アマチュア無線と酒を飲みながら気楽に現場で仕事をしよう」と思っていました。なぜか研究所に配属になりました

その嗜好が大学時代も続いて、電電公社に就職しました。

「アマチュア無線と酒を飲みながら気楽に現場で仕事をしよう」と思っていました。なぜか研究所に配属になりました

その嗜好が大学時代も続いて、電電公社に就職しました。

「アマチュア無線と酒を飲みながら気楽に現場で仕事をしよう」と思っていました。なぜか研究所に配属になりました

第33回「猿橋賞」を受賞して

理化学研究所仁科加速器研究センター
准主任研究員 肥山 詠美子(平成元年卒)



このたび、「猿橋賞」という自然科学を志す女性研究者であれば一度は必ず憧れる賞をいただけることを、非常に嬉しく思っております。

私の研究分野は物理学です。目には見えないミクロな量子力学の基礎方程式(シュレディンガー方程式)を3体以上の少数多体系で厳密に解くという難し

世間からは一番遠くて訳の分らない堅物の世界のように感じられると思います。私もその一人で、配属された初日に研究室長に「間違いました。現場に出してください」とお願いして逃げ出すうとしたのですが、もちろん出てはくれませんよ。

「石の上にも3年、頑張ってみよう。ダメなら出してあげる」という先輩の甘い言葉がかかって研究者の卵を始めたのですが、この世界もやり始めてみると面白い事が沢山あるんですね。研究開発は世の中に存在しない新しいモノを追求実現するのですが、これが修猷時代にワクワクした未知の外国無線局との遭遇に通じていたんです。

こうして「僕は藪漕ぎ屋だ」と称して世の中の常識を打破す

ました。ハイパー核物理実験は、東海村のJ-PARC実験施設で計画されており、今後の発展が期待されています。また、日本でも「京」という京速コンピュータが開発され、少数多体系計算自体も今後、発展を遂げることが期待されます。

そもそも、物理という研究を目標そうと思つたのは高校3年生のほぼ終わりの物理の授業の時です。その当時、原子核の構造が目に見えないのに、数式で物理的現象を表すことのできることに感銘を受け、即座に、九大の物理学科に行くことを決めました。そのころの修猷館は自由な校風でした。だからこそ、すべてを自分の意思で決定し、決定したことは最後まで突き進むのだということを、例えば、修猷館時代の運動会などで叩き込ま

る仕事に没頭することになったのですが、その藪漕ぎ屋が65歳の働き盛り?の今、学会なども含めた産官学が連携した「新しい形のコンソーシアム」で、表題の2つの活動を実現すべく動き回っています。

・業際イノベーション・業界の枠を超えて異業種の連携でイノベーションを創造し、社会を再生させる。例えば、都市の再構築。日本では、少子高齢化にマッチする都市システムへの改造。新興国では、成長と持続性を両立できる都市への変革。

・シニアの活躍・日本が誇れる「経験とバイタリティが豊富健康で・年金付の」65歳以上の1千万人超の人材に、社会貢献や振興国社会基盤の改善で活躍してもらおうこと。

れたように覚えております。この校風は、「今、どういう研究をすべきか、何を明らかにすべきか、そして最後までやり遂げる」という研究スタイルの根幹を築きあげることに、大変貢献したのだと実感しております。

自分のこうした経験を通じて、後輩たちには是非、もし、道に迷ったら、まずは、何をしたいのかを自分に問いただすとともに、一度決定したことは質実剛健そのままに突き進んで欲しいと思います。

この研究分野は物理学です。目には見えないミクロな量子力学の基礎方程式(シュレディンガー方程式)を3体以上の少数多体系で厳密に解くという難し

このような未発見の原子核の新奇な構造や性質を独自の計算法を駆使して実験に先駆けて予言し、その後の実験結果と比較して我々の予言が高精度で一致し

第33回猿橋賞授賞式にて。米沢富美子会長ととも。



「衛藤野球部監督、 育成功労賞受賞」

衛藤 震治(昭和41年生)



右が本人。選手(左)とともに。

平成25年8月15日、甲子園の試合の間、修猷館高校野球部の衛藤震治監督(65)に「育成功労賞」が贈られました。ポランティアで30年近く母校の指揮を執ってきたことが、高校野球の選手育成などに貢献した指導者として評価されたのです。

「1986年に監督に就任した当初は厳しい指導も強いましたが、なかなか勝てませんでした。選手の長所をほめるように心がけると、選手の技術・チーム成績がみるみる上がりました。練習を見守り、悪い点があった場合はできていない点を指摘し、どう修正すれば良くなるのかを理詰めで伝えます。生徒達もともと頭がいいので、一度教えただことはすぐに吸収して修正していきます。」

チームには実力もつき、2009年には福岡県のベスト4に進出。以前は見向きもされなかった強豪校も練習試合に応じてくれるようになりました。

一 昔と今との違い
「昔と今とは、練習内容、栄養指導の面で違いがあります。選手時代には、投手は投球練習や試合後に肩を温めるのが常識で、プールで泳ぐこともご法度でした。現在は逆でアイシングするのが常識です。練習中は水を飲まない、うさぎ飛びや足を伸ばしての腹筋など、余り効果はないことを当時は当たり前として行っていました。チューブを使ったインナーマッスルのトレーニングを行うことで、以前より肩を壊す選手は減りましたし、全般的に怪我をする選手が減りました。」

「るびす会」 第15回 総会が開催

平成25年9月22日新宿三井クラブにて、第15回るびす会総会が行われ30名ほどの館友(4名の学生も参加)が集まりました。参加者が60年余に及ぶ年齢幅の集いに柔道部の伝統を感じます。「るびす会」は平成11年2月、修猷館柔道部OBの親睦会として設立、会長は清原慶三先輩(昭和27年生)、戦後柔道部初代主将)、副会長は和栗真次郎先輩(昭和27年生)。

「目標は甲子園に行つて試合をすることです。今回生まれて初めて甲子園に行きましたが、甲子園のグラウンドはよく整備されており、ぜひここで試合がしたいと思いました。普段の実力以上の力が発揮できるような気がしました。」

四 受賞時の主将
「選手時代、二年生の感想」
「日頃、絶対に怒らないうちに指導する監督を改めて尊敬するとともに、このように表彰される監督に指導していただけることに皆感謝しています。私自身、バッティングフォームのアドヴァイスを受けたところ、1、2週間後の試合で三安打し、うち一本は高校生になって初めてホームランを打つことが出来ました。」

五 感想
奇しくも日本のスポーツ界は、その指導体質を問われている転換期にあると思います。相撲界しかり、柔道界しかり。今回の監督の受賞については、スポーツ界の指導問題が表面化するほるか以前から修猷館野球部の監督がほめる指導を実施し、実績も残されてきていることに誇りを感じました。また、必要な指導はするけどもあくまで練習は選手の自主性を重視している様子がわかりました。我々が先輩から受け継いできている「修猷力」はいまでも受け継がれているのを感じ、嬉しく思いました。それと共にさらに野球部を応援したくなるきっかけともなりました。

二 文武両道
修猷館のグラウンドには未だにナイター設備はなく、19・30には下校することになっていますので、暗くなるとボールを使わずにトレーニングをするそうです。

池田 憲昭
(昭和62年生・無二の会)



(問合せ先: 山口浩利るびす会幹事長(昭和33年生)、hyama@dm.mbn.or.jp)

つながっている「修猷力」

つなげていききたい「修猷力」



一 学生時代について

○ お二人は学生時代からの知り合いですか。

薬師寺議員(以下「薬」)「同じクラスはないが、知っていた。運動会ではいつも違うブロックで敵同士(笑)」

笠議員(以下「笠」)「元々知っていたが、東京修猷会の総会や二木会などで、より一層話をしたりするようになった。元々知っていた人もかなり時間が経つても、学生時代は知らなかった人とも、仲良く話ができ。総会の果たす役割は非常に大きく、ありがたみを感じる。」

校時代の経験のおかげでそれほどには大変と思わなかった。」

二 政治との出会い・政治が果たすべきこと

○ 政治を志すきっかけは。笠「修猷で、中野正剛、廣田弘毅、緒方竹虎を知り、浪人中や大学時代にも、そうした先輩方の評伝を読んだりしていた。志をしっかりと立てていかなければと思うようになっていた。また、大学時代は、太田誠一元議員の下で書生を経験し、政治に近い現場で、政治が変わらないと世の中は変わらないと思うようになった。」

修猷政談

かつては多くの政治家を輩出してきた修猷館も最近は何となく、2013年は2人の国会議員が誕生しました。そのうちのお一人薬師寺道代参議院議員とその同級生の笠浩史衆議院議員(ともに、昭和58年卒)に、修猷館時代のこと、昨今の政治のこと、これからの若者へのメッセージなどについて語り合っていました。

り政策を心掛けています。政治家になろうと思ったのは、あらゆる局面で、特に公募で委員に選ばれた政府の会議の場などでも、ここにも現在課題となつていて問題を解決できないと感じ、自分でやらなさいといけというよりは、自分があるべきと考えることを実現する一つのステップと考えている。

後に影響を与えてくれた一言だと思ふ。今の子供たちは知識を詰め込まれている感があるが、与えることはできても「考える」力は自分で獲得するしかなく、自分がしっかりしないと筋も通せないと思ふ。そういう意味では、自由闊達な校風の中で、「考える」力を培ってもらったのかなと思ふ。」

三 後輩たちへのメッセージ

笠「これからの時代、いろいろ大変なことが多いと思うが、失敗もよい経験になるので、失敗を恐れずチャレンジしてみよう。その中から自分を成長させるとともに、周りに刺激を与えられるような人間に成長してもらいたい。」

父は修猷の出身ではないが、修猷のネットワーク・求心力が非常に魅力的に思えた。大ファンだった。そのため、久留米から越境入学した。元々、群れるのがあまり好きではなく、自分で考えたい。立ち止まらず、一人でも行動する、特に、疑問に思うことは解決できるまで突っ走る性分だったが、高校時代から自活したことが、自由闊達な校風と相まって、独立自尊、自分のことは自分でやるといった気概を育て、問題解決能力を養ってくれたと思ふ。

自分の政治家としての経験から、また、自分自身が政治家として常にそうありたいと思つているのは、最終的に「自分で決める」ことができる人間になること。いろいろな人から様々な意見を聞くことは必要だが、最終的には「自分で決め」て、実現することが重要。そのためには、目的をはっきりとさせること、そして何より、人を説得したり、異なる意見を調整したりすることが必要だが、そのためには、立場は違つても相手の「信頼」を得ることが「人間性」を身に付けることが重要だと思ふ。」

○ どのような学生時代でしたか。笠「自由闊達な雰囲気、のびのびと過ごさせていただいた。運動会では応コン長をしたが、全員がある意味バカになって同じ目的を目指した。本当に良い経験。また、修猷館という名前を知っている人は上の方々にも非常に多く、声をかけてもらえることも多い。」

修猷では新聞部だったが、中野先輩など諸先輩の生きざまを見る中で、政治に対する意識が芽生えたのだと思ふ。」

薬「自分はずっと政治に興味はなかった。今もない。政治よ

層の育成も重要だが、この「分厚い中間層」を活かすためには、グローバル化や情報化が進む中で、学び直しができるよう生涯教育を充実させることも重要。国民の意識が多様化する中で、すべての人たちに満足して



薬「自分たちが子供の頃は、「積み木」一つあればいろいろな遊びを考え出した。今は、なんでも与えられすぎて、このゲームはこのやり方と決めつけてしまつて、新たな発想がでにくくなつていっているように思える。変化することを恐れないで、小さくまともな(これはこれで)決まらな(これはこれで)重要なことだと思ふ。将来の自分の姿を見据えて、一度は、なりた自分を目指して挑戦するように努めてほしい。」

部活動OBの交流の場

〇硬式・軟式テニス部

昨年、硬式テニス部OB会と軟式テニス部OB会の交流の場がそれぞれSNS(硬式テニス部のはFB(フェイスブック)中に開設されました。OBの再会・交流を目的とするともに、現役生の活躍状況についてのレポートなども掲載されています。

同窓会組織とは別途の私的なもので、登録した方のみが参加できるようにしています。

硬式テニス部と軟式テニス部のOBの方はそれぞれ是非一度

のぞいてみては。

■硬式テニス部 OB 会専用フェイスブック
<https://www.facebook.com/groups/598246700203017/>

■軟式テニス部 OB 会専用 SNS
<http://tennis.globe-f.co.jp/>

世界に輝く六光星

修猷卒業生 海外レポート(ドイツ)

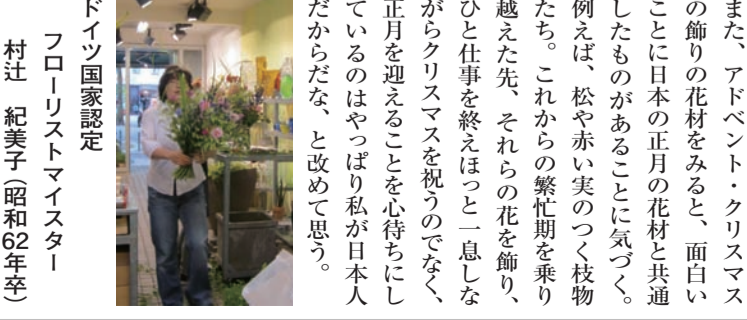
10月1日秋らしくなつたと同時に、街中には冬支度、クリスマス支度のための品々が並び始める。さあ、花屋にとつて一番の繁忙期であり、クリエイティブな期間がまもなく始まるうとしてい

クラシックなデザイナーの他にも、時代の変遷と共にデザインにも、マテリアルも多様多彩になつており、毎年新しいアイデアを持ち寄り、形にしていくなか、フロリストのこの時期の一番の醍醐味。早朝から夜遅くまで休み無く続く大変な作業を頑張るの、この「創る楽しさ」を味わってしまったからだと思ふ。フロリストは私だけではない。だからだ、と改めて思ふ。

クラウンを飾り、家族と共にイエスの誕生による新しい始まりを厳かに迎え、祝うドイツのアドベント・クリスマスは、飾り、鏡餅や門松を飾り、家族と共に新しい年の訪れを祝う日本のお正月と似ているような気がする。また、アドベント・クリスマス

ドイツではクリスマスの四つの日曜日からクリスマス準備する期間「アドベント(待降節)」に入る。このアドベントの期間はクリスマスのデコレーションはもちろんのこと、「アドベントクラウン」という常緑樹の枝でつくったリースに4つのキャンドルを立てたものが飾られる。最初の日曜日は1本。次の日曜日は2本。その次の日曜日は3本。そして4本のキャンドルが全て灯つたらクリスマスはすぐそこ。

ドイツ国家認定フロリストマイスター村辻 紀美子(昭和62年卒)



修猷生は今



第66回修猷大運動会 テーマ 一戦統一

前日練習

「先輩方の偉業・伝統」と現役生が表している修猷大運動会が9月7日(土)に行われた。17日連続猛暑日、福岡観測史上最高の37.9℃を経験した今年の修猷生。2週間の正規練習中、大雨にも邪魔された。応コン練習の歌声は時折、西新商店街へ届く程。ブロック生に自信をつけさせるため、全員で声出しをし、良く笑って苦しい練習に耐えた。ブロック編成は白・青・黄が8クラスに対し、赤は7クラス。

元タンブリング長より解説
「単七」は一番下の段が7人の7段ピラミッド。ピラミッドは高くなると、自重で横方向に開こうとする力が働く。それに対抗するため、下の段を9人以上にするなど幅を広くして全員が中心に力を集めると立ちやすくなる。よって単七は、見た目は小さいが、難易度が非常に高い。影ピラは、ピラミッドの後ろにへばりついている、ピラミッドへ上がるための足場。

赤ブロック優勝
人数が少ない赤が優勝した。水タンブリング

運動会当日
およそ8時間のプログラム中、時折雨に見舞われたが修猷生にとっては、焼け石に水であった。

水タンブリング
「お前ら、もし悩むことがあったら、大幹に言え。大幹は必ず助けるけん。いいやー!!」
「おー!!」で地響き。

水百道が浜水
応援コンテストで披露される第2バックは、模造紙をガムテープで繋ぎ合わせたもの(テープの順番・方向も代々伝承)。するすると降ろす為、裾に百道浜の砂を仕込んだ。

又、その百道の浜には、夕方エーラーが「浜練」に集った。

その他、第66回のはたどり
3年前から導入された「ダンスパッツ」を今年初めて全学年揃って着用。

水騎馬戦
反則によって勝敗が決することが多々あった例年を反省し、今年度は原点に戻ってルールを見直し、正々堂々と「いい勝負」をすることを目指した。

この日、単七を4回試みて、初めて1回成功。「俺の顔を見る！俺を見る！」というタンブリングをピラミッド全員がしっかりと見る事が出来た。「お前等あ、有難うー!!」
修猷のリーダーシップ、フォロワーシップが受け継がれている。

水ブロック集会
「語りの修猷」という文化も生徒の気持ち・目標を統べた。「最初みんなの様に応コンを頑張れなかった。でも、泣きながら頑張ろうという先輩の話を聞いて、頑張つてみたら、一生懸命すると楽しいという事を知りました。」
と言う1年生女子に大拍手。

3年生男子が「お前ら、もし悩むことがあったら、大幹に言え。大幹は必ず助けるけん。いいやー!!」
「おー!!」で地響き。

どのブロックも七ペラを見事に立てた中、赤は「単七」を成功させて群を抜いた。
水綱引き(男女)
赤は、綱長が研究した作戦を、ブロック生が習い、秘密裏に暗記し実行した。

脇口ツク(脇で綱をしっかりと挟む)・親指の爪が空を向く・視線は真正上空・両肩の高さを平行・足を揃える・真後ろに引く。

ロケットスタート 後ろのグループはスタート前から引いておく。それを前のグループは、後ろに引かれぬ様、耐えておく。

同時に前のグループも綱を引くと、一気に力が入って綱を引ける。

綱の引き方 「バン!(ピストル) ↓ 相手が「せーの」で引き始める前に「わー!!」で一気に入りにロケットスタート。叫ぶと力が入る。力を抜く時も耐えたまま。

練習期間中から負けなし。赤ブロックは他に、棒引き・応コン・バックも1位であった。

他の高校では、当日ぶつつけ本番で競技することも少なくない。体育祭ではない、修猷大運動会の真髄はそんなところにも現れているのではないか。

当日

修猷館高校の一角に緑に囲まれ風格漂う外観をもつ資料館がある。そこには修猷館の豊かな歴史を伝える数多の貴重な資料が取められている。資料館に入ると左側に展示室があり、その壁に大きな五輪旗が展示されている。これは昭和39年(1964年)10月の第18回オリンピック東京大会においてメインスタジアムとなった国立競技場で翻っていた五輪旗であり、各方面から注目されているものである。東京オリンピックから半世紀の時が経過したが、五輪旗を見るのが当時の記憶・国立競技場の階段を聖火を持って登っていき最終ランナーの姿や開会式での日本チームの行進、大空に描かれたブルーインパールの大五輪、柔道・女子バレー・男子体操等日本選手活躍の感動とともに魅惑してくる。オリンピックは東海道新幹線、首都高速道路、東京モノレールの建設など日本経済や国民生活の発展に大きな寄与をもたらした。この東京オリンピックの最高責任者である組織委員会会長を務めたのは当時の修猷館同窓会長である安川第五郎氏(明治39年卒)である。

五輪旗と修猷館高校
修猷館高等学校 講師(元 総括教頭) **渡辺 公利**

安川氏は安川電機社長、九州電力会長、日本原子力産業会議会長等、経済界における業績とともにオリンピックで示したように社会貢献の面でも大きな実績を残している。

オリンピックが大成功に終わった直後の昭和40年1月30日、本校講堂において安川氏を講師とするオリンピック記念講演会が全校生徒1800名、保護者、同窓生多数出席のもとで行われた。この講堂ではちょうど一年前の昭和39年1月27日に、組織委員会会長に就任した直後の安川氏の激励会を開催しており、記念講演会で安川氏は、大役を無事に果たせるか「不安な気持ちの心の中に漂っておった」が、このときの激励会で修猷館の同窓生や在校生から受けた激励に「非常に心強い気持ちであったことを忘れることができない」と回想している。東京大会の運営はIOC委員から「後にも先にもないだろう」と言われたほど見事に組織されたものであり、それに感動したアベリ・ブランドージIOC会長から渡された五輪旗が、組織委員会から記念のため安川氏に贈られた。しかし安川氏は「家に置くよりも若い人たちの奮起に役立つなら」として贈ることにし、記念講演会に先だつて行われた贈呈式で五輪旗は修猷館高校に寄贈された。その後、修猷大運動会の入場行進ではその由来についてのアナウンスが流れる中、先頭に立つ運営委員が五輪旗を高く掲げて行進している(現在は本物は傷まぬように資料館に保存し、運動会ではレプリカを使用している)が、運動会を組織する運営委員を始めとする生徒たちにとっては組織委員会会長として巨大な事業を成功に導いた大先輩の偉大さを感じ、励まされる瞬間であろうと思われる。

田弘毅(明治31年卒)を主人公とする演劇が地元の劇団により本校講堂で上演される予定である。修猷館にとっては歴史を振り返り、これまでに築いてきた伝統を受け継ぎさらに高い峰をめざす決意を新たにしている年になるものと思われる。

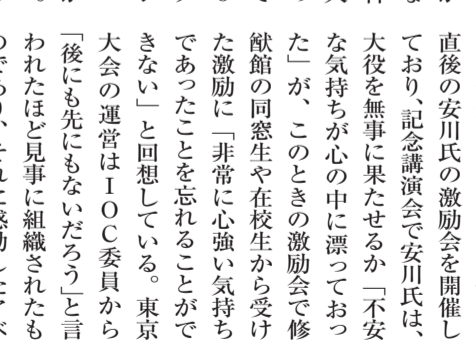
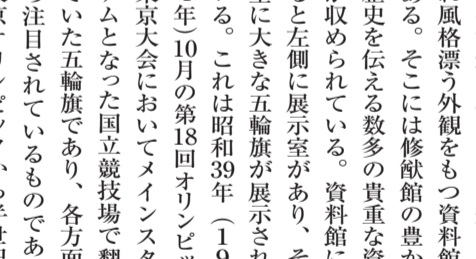
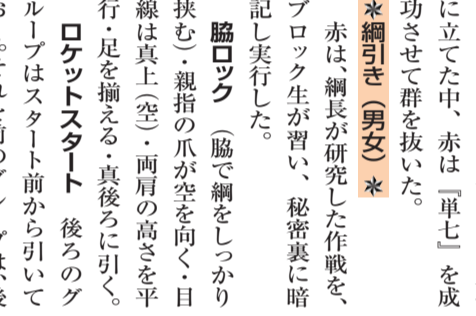
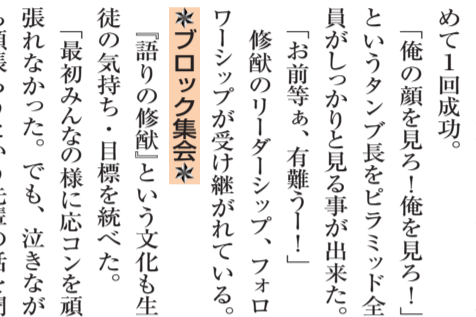
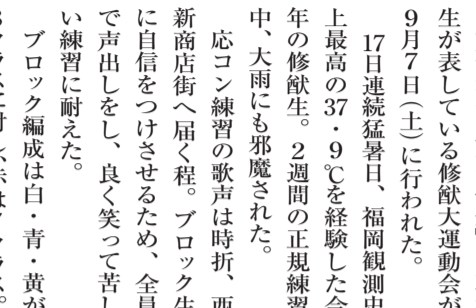
安川第五郎氏は五輪後、依頼された揮毫には必ず「至誠通天」の四字を書いたという。

このことは館長にある「猷を修むと名に負ふもやがて至誠の一筋ぞ」の一節を思い起こさせる。修猷の五輪旗は、ただ昔日のエピソードを偲ぶ記念としてのみではなく、その背景にある、「世のため人のため」に尽くしてきた修猷館の大先輩の生き方もも在校生へ伝え励ますものとして語られることが、この五輪旗を寄贈した安川第五郎氏の思いに込められているものであると信じている。

文・絵 西村 万里子
(昭和62年卒・無二の会)

修猷館は今年で創立230周年を迎え、5月の創立記念日には福岡県初の総理大臣である廣

運動会では五輪旗を持って入場する



資料館に所蔵の五輪旗と渡辺先生

修猷は今

「部活動」～己に克つ～

副館長 古川 浩輝

今年の新入生に配付した『修猷生となるために』の部活動紹介の冒頭に「部活動と勉強を両立させるのは難しい、しかしつらさと共に必ず得るものがある。己に克つために…」と記述されています。古来より学問と武道は一体であり、どちらも厳しい修練をして人として向上せねばならない。文は武の根となり、武は文の根となる「文武不岐」が唱えられてきました。まさに修猷生は、館歌に恥じぬよう文武に励み、自己研鑽に努めています。



1 福岡県総体学校表彰

福岡県高体連は、運動部活動の更なる活性化と競技力の向上を目指すために平成22年度より総合体育大会(いわゆるインターハイ)県大会全ての競技における成績と競技参加を点数化し、表彰することにしました。

学校対抗の部(男女総合)

	平成22年度	平成23年度	平成24年度
1位	東筑高校	九州国際大学付属高校	九州国際大学付属高校
2位	修猷館高校	修猷館高校	修猷館高校
3位	明善高校	東筑高校	東筑高校
4位	福岡高校	鞍手高校	福岡高校

本校は、多数の部活動が県大会に出場(参加点)し、山岳部・ヨット部をはじめラグビー部・柔道部・弓道部が入賞(競技点)したことで、3年連続2位を獲得しました。

2 平成25年度部活動加入率

加入率92.4%でほぼ例年通りですが、1年生男子の体育部への加入が例年より多い傾向が見られます。とは言え、体育部同様に文化部も活発に活動する修猷館は健在です。

3 平成25年度活動状況

体育部では、多くの団体もしくは個人で県大会出場を果たし、文化部もほぼ全てが県大会以上の研究や活動を行っています。あまりの多さに紙面上割愛させていただきますが、特筆すべき活動のみ掲載させていただきます。

新聞部	全国高校新聞年間紙面審査 優秀賞
吹奏楽部	九州大会銀賞(5位)
書道部(個人)	全国高校総文祭優秀賞、九州高文連優秀賞、全国書道展準優勝
ディベート部	全国大会5位、全国大会即興ディベート優勝
放送部	NHK杯全国コンクール出場(朗読部門)
数学研究部	日本数学オリンピック本選出場
水泳部	男子2名、女子2名九州大会出場、女子1名全国大会出場
山岳部	全国大会女子12位
陸上部	女子走り高跳び北部九州大会優勝、男子幅跳び国体選考会優勝
ヨット部	男子・女子ともに全国大会出場

ここに紹介できなかった多くの修猷生も、称賛されようがされまいが、真剣なまなざしで青春を駆け巡っています。その姿に修猷館の底力とともに美しさを感じます。



現在の西新本店。入り口は左手の通路側にある

「今も昔も、高校生の懐に優しいお値段です。店長 最初は1個10円からスタートして、20円、25円、30円で、今は90円。できる限りぎりぎりまで値上げしないよう頑張っています。」

「蜂楽饅頭で(あんこの)白のおいしさに目覚めた。」
 「『水蜂楽』に手が届かず、コバルトアイスを食べながら「いつかはきつと」と誓っていた。」
 「当時はたった100円で白と黒の両方が食べられた幸せ。今も大好きです。」

東京研修旅行記

「東京で」感じたもの

2年 加藤 まなつ



今回の東京研修旅行では、OBの方々の多大なご支援のもと、本当に多くの貴重な経験をさせていただきました。書き出すとさきがありませんが、3日間全体を通して感じたのは、「実際にその地へ赴いてみて、実際にその人自身に会ってみて、初めて感じられるものがある」ということです。日本航空で実際に社員の方々が仕事をされているのを見たり、フライトシミュレーターの体験をさせていただいたりしたことや、この目で東大の赤門を見た感動、高い志をもって受験を制した先輩方の熱いお話を聞いたことなどは、修猷の校舎の中では決して得ることのできない経験でした。



国会議事堂など様々な機関を訪問する

東京で得たものは本当に多く、感じた思いは本当に大きかったです。だからこそ、それをその場限りの思い出にしたいけないと思えました。社会に出て働くことの大変さややりがい、そして今の私たちにとって最も大きな壁である大学受験への立ち向かい方。教えていただいたことの全てを自分のものにして、残りの修猷生活に生かしていこうと思います。

また、私たちが修猷の後輩というだけでお忙しい中時間をさいてくださったOBの方々には感謝の思いでいっぱいです。修猷の繋がりの強さを感じた3日間でもありました。本当にありがとうございました。

修猷あれこれ

ピックアップ
 新人入生は入学式に「質朴剛健」「不羈独立」「自由闊達」の心をもち「世のため人のため」「修猷を誇る人間にはなるな!」修猷が誇る人間になれ!と教えられる。また、「君たちはまだ修猷生ではない」とも言われる。

ニュートンの木
 ニュートンの生家にも今も存在する林檎の木を株分けしたものが、旧正門から資料館の間に見つける事が出来る。資料館は現在、改築工事の案が上がっているため、樹木の移植が行われる予定との事です。熊本、宮崎、鹿児島にも店舗があります。

高校の立地する西新には、修猷生になじみ深い店が多い。卒業してからも思い出す懐かしの味の数々。西新商店街の「蜂楽饅頭」の店長にお話を伺った。

「蜂楽饅頭と言えは福岡・西新」というイメージですが、他県にも店舗があるのですね。

店長 戦前から水俣で養蜂業を営んでいた創業者が、何かに使えないだろうかと思いついた。熊本、宮崎、鹿児島にも店舗があります。

西新店ができたのは昭和40年。私はその時からここにおります。味は全店同じですか?

店長 基本的には同じですが、あんこは数店舗分をそれぞれ作っています。福岡のいくつかの店舗の分のあんこを作る工場が、西新にあるんですよ。

「昔と味が変わったように感じる」という同窓生もいます。

店長 味は全然変えてないですが、焼き加減や水加減で変わってくるのかもしれないね。

懐かしの味 蜂楽饅頭

「夏場はかき氷が人気です。青色が見た目にも涼しいな。コバルトアイス」を懐かしく思い出す同窓生も多いです。

店長 コバルトアイスは創業のときからありましたが、近年急に人気が出ました。3年前より登場した「持ち帰りコバルトアイス」がよく売れます。あれは、こぼれにくいから食べやすいんですよ。最初は勇気が要ると思いますすけれど(笑)

「最近の修猷生は?」

店長 路面電車が走っていた頃に比べて、商店街を通り抜ける生徒さんは少し減ったように思います。今は、子どもの頃に食べていたという方がお子さん連れて来店してくださったりするのがうれしいですね。



もうこぼれる心配はない!? 持ち帰りコバルトアイス(左)

2013年度寄付金

2012年11月1日から2013年10月31日までに多数の皆様からご寄付いただきました。ありがとうございます。お礼の意味を込めてお名前を掲載させていただきます。(敬称略・卒年別)

また、年会費の納入をまだ済まされていない方は、振替用紙にて郵便局やコンビニからご送金くださるようお願い申し上げます。詳細は同封の案内書をご覧ください。

00170-6-172892 東京修猷会事務局

修猷館同窓会、中京修猷会、近畿修猷会、(館長)奥山 訓近、(昭9)富田 明德、(昭11)橋本 胖、(昭12)宮川 一二、(昭15)明石 隆次、(昭17)安藤 雄三、(昭19)中島 陸月、田尻 重彦、毛利 昂志、(昭20 (4))田中 庸夫、野上 三男、(昭20 (5))尾島 成美、(昭21)稗田 孝道、(昭22)伊藤 輝夫、濱田 理、(昭23)大西 勇、中村 邦也、白木 彬雄、(昭24)安藏 復也、(昭25)山本 義治、(昭26)吉田 周弘、小西 正利、常岡 宏、石塚 和男、太田 進、大平 修、中村 道生、藤吉 敏生、波多野 聖雄、廣瀬 貞雄、湖上 貫之、(昭27)金田 久仁彦、福田 純也、(昭28)松榮 孝昌、(昭29)高木 道子、村越 登、(昭30)遠山 壽一、久保 久、原田 雅弘、星野 節子、堤 正、田中 栄次郎、(昭31)近藤 徹、城戸 弘、石橋 明、村田 和夫、中村 保夫、箱島 信一、(昭32)井上 智晴、吉村 剛太郎、鳥居 健太、内藤 武宣、平野 熙幸、和田 聿生、(昭33)貫 隆夫、香崎 温子、寺澤 美和子、大西 正俊、武石 忠彦、米倉 實、(昭34)加藤 泰、岩田 龍一郎、行武 賢一、讚井 邦夫、是永 知広、田中 義人、服部 富美子、(昭35)伊藤 洋子、可児 晋、江川 清、今村 宏明、山田 昌男、中川 勝弘、藤野 宏、(昭36)安藤 誠四郎、横倉 稔明、倉成 洋三、太田 裕、中島 成之、土井 高夫、浜地 康彦、(昭37)大須賀 頼彦、(昭38)上田 茂、渡辺 紀大、(昭39)貝島 資邦、久保田 康史、(昭40)山形 紀明、泉 和雄、棚町 精子、長谷川 閑史、豊福 敏信、由良 範泰、(昭41)加藤 泰彦、恒松 芳一、高尾 義行、有山 賢良、鎌木 健二、(昭43)伊豆 安生、宮地 徳文、徳重 博史、(昭44)安川 裕行、横田 勝介、甲畑 真知子、坂井 真知子、(昭45)本田 由紀子、湖上 一雄、(昭46)栗山 英俊、鹿兒島 正信、森山 幹夫、土肥 研一、(昭48)北戸 春雄、(昭49)井手 富士雄、橋村 秀喜、古森 光一郎、大島 光子、(昭50)野中 哲昌、(昭51)溝口 計、油田 哲、(昭53)上蘭 勉、新納 康彦、村田 隆信、(昭54)中原 誠也、(昭55)宮内 崇、小池 邦久、上田 英友、(昭56)田中 昭人、徳永 滋彦、(昭57)遠藤 功暁、光宗 信吉、(昭58)安部 眞一、井手 慶祐、(昭59)白壁 勝栄、服部 豊、(昭60)朱雀 誉史、(昭61)井村 千明、村田 広史、(昭62)田尻 公一、(昭43)学年

2013年 二木会

- 第589回 H25.1 『どうなる日本のエネルギー』 福江一郎 (ふくい いちろう) さん (昭和40年卒) 三菱重工業株式会社 特別顧問
- 第590回 H25.2 『カフェのある風景を創る』 楠本修二郎 (くすもと しゅうじろう) さん (昭和58年卒) カフェ・カンパニー株式会社 代表取締役社長
- 第591回 H25.3 『日本の医療制度について』 横倉義武 (よこくら よしたけ) さん (昭和38年卒) 公益社団法人日本医師会 会長
- 第592回 H25.4 『福岡県の発展戦略～「県民幸福度日本一」を目指して～』 小川洋 (おがわ ひろし) さん (昭和43年卒) 福岡県知事
- 第593回 H25.5 『登山で見る世界観』 栗秋正寿 (くりあきまさとし) さん (平成3年卒) 登山家
- 第594回 H25.7 『邪馬台国は福岡市付近にあった』 貝島資邦 (かいじま すけくに) さん (昭和39年卒) 古代史研究家
- 第595回 H25.9 『ことばをつむぐ』 第7回Salon de 修猷 出演: 広渡敬雄 (ひろわたり たかお) さん (昭和45年卒)、松隈剛 (まつくま たけし) さん (昭和61年卒)、入江信吾 (いりえ しんご) さん (平成7年卒)
- 第596回 H25.10 『世界で闘う日本の建設機械産業』 木川理二郎 (きかわ みちじろう) さん (昭和41年卒) 日立建機株式会社 取締役会長
- 第597回 H25.11 『東西文明の融合と日本の役割』 —最近のアジア太平洋情勢を含めて— 井尻秀憲 (いじり ひでのり) さん (昭和45年卒) 東京外国語大学 外国語学部教授
- H25.12 忘年会 ※肩書・所属は講演時のもの

東京修猷会 URL <http://www.shuyu.gr.jp>

「修猷を体現する」熱いDNA

第三十代館長 奥山 訓近



東京修猷会の皆様、新年あけましておめでとうございます。厳しい寒さの時節を迎え、少しでも皆様の心が温まるよう昨夏の修猷をお届けします。

7月・8月と2ヶ月連続して全国で最も暑かった福岡市と修猷の貴重な熱い夏が終わった。9月7日の薄暮、静寂を取り戻したグラウンドに、一人になって自分と向き合う姿が幾つもあった。この日を造り上げたリーダーたちの表情には、達成感と開放感、そして終わってしまった：

という複雑な思いが交錯しているように見えた。

毎年、多くの人に感動を与え修猷大運動会であるが、その本質は、生徒による生徒のためのものであり、単なるイベントやショーではない。生徒たちのあの姿は、我々が気づかない数多くの掛け替えないドラマが一人ひとりの心に刻まれていたからであろう。

「緑」の大運動会運営委員と、「赤」「青」「黄」「白」の各プロックのリーダーが高い志と献身的な使命感を発揮し、全校生徒は各々の立場と役割を自覚して、自分がやらねばならぬことを全力で遂行した。正々堂々、力と技と知的創造力を競い合い、全ての仲間と創る大運動会に、修猷の本質と魅力が凝縮されている。

この大運動会です。育んだリーダーシップ、メンバーシップ、チームワーク、感謝と思ひやりの心、

昭和40年卒 学年便り

昭和40年に卒業した我々「しつとう会」と称しております。

そして何より、信頼で繋がった多くの仲間を得たことは、将来、修猷生が地域や日本・世界のリーダーとして活躍するとき、更に大きな宝となっているに違いない。その根拠は、私がお世話になった各支部同窓会の様子にはつきりと現れているからである。

責任ある立場を忘れて手前味噌めいてしまいましたが、その真偽を確かめるために時には福岡に帰省していただき、「大運動会」(9月)や「大文化祭」(3月)で直に叱咤激励を賜りますよう、そして今年も修猷に熱いご支援をよろしくお願い申し上げます。

他学年の名称は卒業年次と会の名称の語呂合わせに少なからず苦心されたと思受けられますが(失礼!)、我々の名称はその構成員の性格とは裏腹にまことに素直なものです。

大半が終戦翌年の昭和21年生まれです。この年に生まれた人数は、20年生まれよりも多いが、22年から始まるいわゆる「団塊の世代」程には多くはないらしいです(政府の人口動態統計では、昭和19年から21年までの正確な出生統計が無いそうです。戦中戦後の下サクサで赤ん坊の数まで数えているヒマは無かったのでしょうか)。

戦後教育をまともに受けて育ったせいでしょうか自己主張の強いところが目立ちます。放っておくとどの方向に行くか分からないので東京しつとう会(しつとう会)の東京版です。では昔からその運営をルール化してきました。今年度は遂に規約として成文化しました。

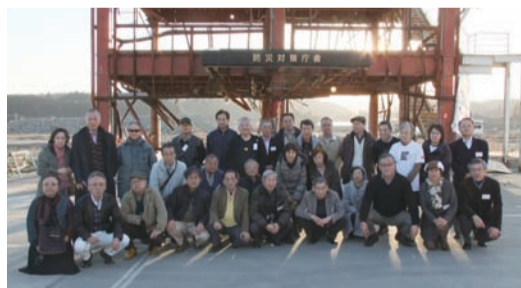
各年の担当クラスを決めてお

き、持ち回りで1年間幹事として年間2〜3回旅行会や懇親会を企画立案・実行するものとし、責任を持って次年度幹事担当クラスへ引き継ぐというものです。

この欄で諸先輩方が述べておられるとおり、我々も66〜67歳で来年は卒業50年目を迎えます。職場をリタイアする人が増えてきたことや寄る年波で円熟してきたからでしょうか、最近旅行会や懇親会への参加が多くなってきており、30名程度の参加も珍しくありません。

平成24年度は9月に屋形船を借り切って隅田川上りをし、夜間のスカイツリーを展望しました。25年3月には東日本大震災復興支援の意を込めて南三陸町教育委員会への育英資金を寄贈するとともに東北旅行会を実施しました。その際、東北修猷会にお世話になりました。

本25年度は6月に東京競馬場視察会を敢行しました。参加者の大半が馬券購入初体験でしたが、勝った人あり、負けた人あり



「東京しつとう会 東北旅行会」平成25年3月開催

昭和40年卒 常任幹事 由良 範泰

執行部紹介



刀禰新副幹事長(昭和61年卒) 六一会の刀禰晋輔です。総会幹事、二木会幹事を経て、このたび東京修猷会副幹事長を拝命いたしました。主に総会を担当させていただきます。関東をはじめとして多くの館友が集う一大イベントである総会を皆さまに楽しんでいただけるよう、盛り立てていきたいと思っております。ご指導、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

幹事学年も一致団結、企画に工夫を凝らして鋭意準備を開始してまいります。是非ともご参加ください!

編集後記

今号では、「つなげよう 修猷力」という昨年の総会のテーマをモチーフに、社会で活躍する館友がどのように修猷力を発揮しているか、現役の修猷生がどう引き継いでいるかを表現してみました。

「修猷」の2文字だけで瞬時に共有できる「思い」に理屈はいらぬ、そういう意識が世代を超えて共有されていることや、脈々と築かれてきたこの「思い」は、これからも引き継がれ、閉塞感あふれる今の日本においてこそもっと活かせる、そう再認識できる貴重な機会となりました。

末筆ではございますが、編集にご協力いただきました皆様にご心よりお礼申し上げます。

昭和62年卒 会報編集担当 一同